

## 8. おもちゃ

一九一一年ドイツのドレスデンで博覧会が開かれ、日本が陳列したおもちゃ、古来から流伝するもの六十九、新しいもの九、全部で七十八件が、当時すこぶる賞識を受けた。あとで京都の芸草堂が着色木版で図譜にして、『日本玩具集』と名づけた。清水晴風の『うなゐの友』の完璧なものには及ばないけれども、人を十分に楽しませる。おもちゃは本来子ども本位であり、子どもが“自然”という学校で使う教科書や用具であり、教育者にとって客観的な研究価値がある。だがわれわれふつうの人間にもとても面白く思われ、これはおもちゃの骨董趣味と言ってよい。骨董をいじる人は大抵二つの点に特に注意する。一つは古いこと、二つは珍しいことである。これは正当な態度ではない、なぜなら彼が重んじるのは骨董それ自身以外の事であるから。ちょうど恋人の家柄財産に気が行って人物本体を忘れるようなものである。だから本当に骨董をいじる人は骨董そのものを愛する。それが金にもならず、役にも立たず、極めて平凡なものであっても。収集家と鑑定家以外にもう一つ鑑賞家の態度がある。功利の問題を超越し、ただ趣味の判断によって、享樂を求める、これこそがわたしの言う骨董家である。それが芸術家と違うのは、ただそのような深く厚い知識がないだけである。彼は芸術品を愛し、歴史的遺物、民間工芸、及びおもちゃの類を愛する。あるいは木の葉や貝殻など自然物でも愛さないものはない。こうした人を骨董家と言うが、好事家 (Dilettante) と言ったほうがもっと適切かもしれない。この名称はそれほど尊重されないようだが、わたしはこうした態度はとてもよいと思う。この博大な砂漠のような中国では少なくとも必要である。なぜならサボテンのような外は荒くて中が豊潤な生活こそわれわれの唯一の道であるから、たとい現在では世に辱められる隠逸に近くとも。

おもちゃは子どもが遊ぶように作られたが、大人も遊んでいけないことはない。おもちゃは子どものために作られたが、それによって大人たちの思想を読むこともできる。われわれはおもちゃを愛するととても多くの大人がいることを知っている。わたしは祖父が言うのをよく聞いた。唐家の叔父が机にいくつか“泥人形”を並べ、それに一皿飴玉（一名円眼糖、形が龍眼に似ているから）をおいて、子どもたちに本を読ませる、十（？）遍読めば一個食べられるのだが、子どもは待てず、おうおうこっそり手にとっては一なめして、また皿にもどす。この唐家のじいさんは奇怪な顔をしていて、みんなは彼におかしなあだ名をつけたが、わたしはこの話を聞いて、可笑しいけれどもすこぶる愛すべきだと思った。フランス (France) の極めて面白い文集に、ベルギーのロモンニールが書いたおもちゃの喜劇を批評した文章がある。彼は言う。“わたしは今日発見した、彼はしょっちゅう子どものおもちゃを手にとって自分で楽しんでいるのを。この趣味はわたしに彼に対する新しい同感を引き起こした。わたしは彼の賛成者である。なぜなら彼のそのおもちゃの詩的解釈であるから、また彼は神秘的な意味をもっているから。”後でもまた言う、子どもが机の上に彼の鉛の兵隊を並べるのは、学者が博物館で彫像を整理するのと、なんの大した変わりもない。“両者の原理はまさに同じである。おもちゃを掴んでいる頑童は、一人の審美家である。”われわれがもし一つのおもちゃに対して、ちょうど彫像か他の美術品に対して、その頑童が持っているものに近い心情を抱くならば、われわれの内面生活はずっと豊かになれるし、

孝子伝の老萊子が色鮮やかな着物をきて雛人形で遊ぶのは、親を楽しませるためでなかったら、わたしはそれが最も羨むべき生活であると確信する。

日本の現代のおもちゃは、その集に記録されたものも、決して貧弱ではないが、天沼匏村が『玩具の話』第二章で不満を表して述べている。“実際日本人は玩具に冷淡である。極言すれば児童に無頓着といはれても仕方がありますまい。第一玩具を軽蔑してゐます。或物を評する場合にも、「なんだ此様な玩具見た様なものが」といひます。又「子供ぢやあるまいし」と一口にいひます。”振り返って中国を見ると、さてどうか。老萊子は雛人形を弄び、『帝城景物略説』は陀羅・空鐘を言い、『賓退録』は路徳延の「孩児の詩」五十韻を引き、“竹を折りて泥燕を装い、糸を添えて紙鳶を放つ”などの語があつて、玩具の史実の資料とすることはできるけれども、実際について言うと、もっと貧弱だと言わざるを得ない。個人の回想では、わたしは子ども時なんのよいおもちゃで遊んだこともなく、少なくとも、やや深い印象を残す様な、気に入ったものはなかった。北京はそれでも最もおもちゃを作れるところということになるが、ほんとうに固有でしかもまずまずだと言うものは極めて少ない。わたしは縁日の市で泥製や鉛製の食器や什器を見るがなかなか精美である。そのほかには空鐘（『景物略』に言うのとは違う）などまだ遊べるのがあるだけで、十挙げようとしても、とても容易ではない。中国はいろんな人形のおもちゃを欠いている。これは一番惜しい事である。国語にもほとんどこの名詞はなく、南方の“洋囡囡”は洋火<sup>マッチ</sup>のようにには適用しない。シュレーゲル博士は東アジアの人形のおもちゃは、オランダの輸入に始まると言う。これは中国では多分確実である。この一事にしても中国のおもちゃに対する冷淡さは充分証明できる。おもちゃは人形に限らないけれど、要するに人形が主流であつて、これの欠損は決して微小なものではなく、教育者はもとより大いに慨嘆すべきだが、われわれ好事家にしてもとても失望を覚えるのである。

※初出：1923年3月29日『晨报副刊』